

英国慈善学校の組織化特性に関する研究（その3）

(The Research on the Organizational Characteristics in the British Charity Schools. Part 3)

慈善学校における規約

(The Rules and Orders in Charity Schools.)

柘 植 秀 通

1. はじめに

この一連の研究において、英国慈善学校の組織特性について探求してきた。今回はその3として、慈善学校の規約について述べることにする。ここで述べる規約とは、民間の組織の成文化された基本ルールのことである。

前回の紀要において述べたように、慈善学校および慈善学校運動において、会員の役割は決定的なものであり、その合議制こそ、組織の基本であった。この合議制を基本とする組織を成り立たせるためには、こうした成文化されたルール、規約の制定が重要な存在となる。

このことについてクラークは、18世紀末に向けて様々なアソシエーションにおける成文化されたルールの確立へ向けた動きが活発化していったことを述べている（clark 2000:245）。しかし、慈善学校においては、この成文化されたルール、規約作りが18世紀の初めにまで遡って行われている。このような意味でも、慈善学校および慈善学校運動は、慈善の組織化の歴史における極めてエポックメイキングな事業だと言える。

そこで、今回は、慈善学校におけるルールを少し詳細に見ていき、さらにその発展過程にも目を止めてみていきたいと考えている。基礎資料として、慈善学校運動を主催したキリスト教知識普及協会（略して SPCK）が発行した慈善学校報告を用いる。この報告には個別慈善学校の規約の雛型が掲載されており、主にその雛型について考察していく。18世紀初頭の各慈善学校の報告書を筆者は多少所有するが、そこに書かれた規約の内容は、SPCK の雛形をほぼそのまま踏襲している（charity school at York 1705:8-12）。また、各慈善学校の報告は複数年にわたるものを入手することは困難であり、その変遷を見ていくことも難しい。よって、ここでは SPCK の慈善学校報告の雛型について、その変遷も含めて考察していきたいと考えている。また、比較の対象として、この運動開始後100年以上を経過したバーミンガムのブルーコート慈善学校の規約を随時用いていく。さらに、SPCK 本体の規約をも参照していくこととする。

なお、慈善学校報告においては、Rule および Order という名称で呼ばれている、組織におけるルールを、以降まとめて規約と総称していくこととする。

2. 慈善学校の規約

慈善学校の規約については、前述したように、個々の学校の規約も、SPCK の規約を踏襲する形で出来ている。そこで、SPCK が『慈善学校報告』において提示している規約の雛型について考察していこう。ただし、この雛型は終始変わらぬものではなく、時を経る中で変遷していつているものである。特に、1713年以降の『慈善学校報告』においては、それまではなかった内容によって章立てを行うようになる。その章立ては三つの章で構成されており、第一に理事によって守られるべき規則（rule）、第二に教師によって守られるべき命令（order）、第三に子どもたちの出席のために両親に与えられ読まれる

命令 (order)、と、個々の規約が対象とすべき存在を明確化して分類されている。一方、1712年以前の規約の雛形においては、このような差異はなく、すべてが一体の規約として存在していた。

この三つの章の分け方、特に第一の章を独立した存在として記述することには、きわめて大きな意味がある。それは、この第一の章の中心テーマが、組織の基本原則をも理事の意志決定において、しかも多数決において変えることができるという点にあるからである。すなわち、理事 (会員) の多数決こそが、慈善学校の全てを決する最終決定法であることの明示である。

なお、この章には、その他にも、会計原則と理事による会員の選出基準が示されている。その点では、後述するブルーコート慈善学校のように、意志決定法の詳細な規定とはなっていない。しかし、ブルーコート慈善学校の規約は、この規約提案から100年以上が経過してのちのものであり、長い時間の進展を経ているからこそその詳細な内容だと言える。

このように、明確な分類がされた1713年の規約を中心に、それ以前の規約、またブルーコート慈善学校の例を取り上げながら、時代の変遷を含め、以下少しく詳細に見ていきたいと思う。

第1項 規約1 理事によって守られるべき規則

三つの章のうち、前述のように第一の章は、慈善学校の理事また会員に関わる内容が記載されている。これは慈善学校の組織的基礎となる内容であり、最も重視されるべき内容である。そのため、前述のように、1712年までは明確にまとめられていなかったにもかかわらず、1713年からは、一体のものとして、冒頭に置かれるようになった。

この中には、以下に示すように、組織の意志決定法と会計原則と教員および児童の選定基準という三つの部分があり、それぞれについて見ていきたいと思う。

① 組織の意志決定

第一の章の冒頭の部分には、組織の意志決定の方法が記載されている。前述したように、成文化されたルールが存在は重要であるが、ただ成文化されたルールの存在と言うのであれば、17世紀慈善組織化の実例として挙げられる (林 1999:20) ヴァンサン・ド・ボールのルールはもっと早い時期に、しかも精密なルールを作成している。しかし、ヴァンサン・ド・ボールの会則には、方策・事案の決定方法、特に規約の変更方法などは一切掲載されておらず、会での実務の在り方が叙述されているのみである (Ryan & Rybolt 1995:83-118, 267-300)。一方、慈善学校の規約には、会員の多数決を基本とする意志決定の規定が冒頭に存在している。すなわち、規約の第一の項目となっているのである。

この二つの違いは、神学的に大きな意味を持つ。それは全てが神の支配にあるという、中世的考え方と、霊的支配は神の直接統治のもとにあるが、この世の支配は我々人間の手に委ねられ、その自由意志に任せられているという、中世と近代の精神を大きく分ける要素である。つまり、ヴァン・サン・ド・ボールのように、意志決定法の制定、特に法自体の変更・制定の規約が存在しないことは、ある面では中世的特質の継続と言える。

一方、慈善学校の規約、特に SPCK が提案している規約には、この意志決定の方法論・経営の組織論が掲載されている。しかも、興味深いことに、その掲載位置は、発行年が下るほど前に出てきている。現在、筆者のもとにある慈善学校報告の最古の版は、1706年のものであるが、その意志決定および経営組織の規定は、以下の通りである。

Ⅲ. 会員は、四季勘定支払日後の最初の水曜日に学校の建物に集う。そして、その総会において、出席会員の多数によって賛同された事項は、遵守されねばならない。その総会についての告知は、全会員になされる。

Ⅳ. 一人の会計と四人の理事が毎年、復活週の水曜日に会員から選出され、理事会は司祭

と共に当該学校の直接的世話や経営に携わる。また、上述の四半期ごとの総会に、当該学校の現状と状況を報告する。

(SPCK 1706:7)

とあるが、この組織運営に関する規定は付け足しでもあるかのように規約の末尾に掲載されているのみであり、その前に全条文の2/3以上を、次項以降で述べる、教員の資質・業務に関すること、また児童の両親に求められる義務が占めている。

それに対して、1713年の版では、内容としては以下に示すように、理事の数の違い以外、全く変更されていないにも関わらず、この章の冒頭に置かれるようになった。

I. 会員は四季勘定支払日後の最初の水曜日に、適当な場所に集合する。この総会に参加した会員の多数によって決定された事項は、遵守されねばならない。その総会についての告知は、全会員になされる。

II. 一人の会計と六人の理事が毎年、復活週の水曜日に会員から選出され、理事会は司祭と共に当該学校の直接的世話や経営に携わる。また、上述の四半期ごとの総会に、当該学校の現状と状況を報告する。

(SPCK 1713:4)ⁱ

このことは、慈善学校運動の推進の過程で、いかにこの組織的意志決定の方法論・経営の組織論の規定が重要であるかの認識が高まった結果であると思われる。

この意志決定の方法論・経営の組織論の位置は、たとえば、1736年のエジンバラの慈善学校報告においても (Unknown 1736:3-4)、1781年のホルスリーダウンの慈善学校報告においても (Charity School at Horsly-Down 1781:5-6) 同じように、規約の冒頭に載っている。さらには、19世紀に入っては、ブルーコート慈善学校のように、経営のための委員会および総会の規定が、もちろん冒頭に、しかも全規約の2/3を占める量で記載されているまでになっている (Blue Coat Charity School 1832:26-35)。そして、総会のみでなく、あらゆる意志決定が会員の合意によっていた。このように、各慈善学校では、会員を基礎とした意志決定の方法論・経営の組織論が、多少の内容の違いはあれ、最重要項目として規約の冒頭に配されていた。

SPCK においても、1732年版の規約ではⁱⁱ、この意志決定方法が13ページにわたる諸々の規約の半分を占め、しかも冒頭に「SPCK 全体に関する規約」として配されている。そのSPCKの規約では、まず会員の公式な集まりである集会のあり方を以下のように示している。この集会は、設立当初毎週行われていたが、当時は変更されて毎月行われるようになっていた。

1. この協会は、The Society for Promoting Christian Knowledge と称する。毎月第一火曜日、午前10時に集まる。随時、集会の情報は、ロンドン周辺の常任会員と通信会員全員に告知される。

(SPCK 1732:3、4)

次にその集会の定足数と、満たない場合の規定を以下のように設けている

ⁱ 以降、特に記述がない場合、慈善学校の規約は、この1713年の版の慈善学校報告に従い、I、IIという形式で表わしていく。

ⁱⁱ この規約についての記述は、1699年3月のSPCK議事録に既に登場する。しかし、現在筆者が引用できる規約は、1732年のものである。

2. 全事業は、協会によって認証された短い礼拝が終わるまで始めてはならない。また4名の常任会員が出席するまでは、結論を下してはならない。もし、出席数が足りない場合は、委員会としなければならない。

(SPCK 1732:4)

SPCK においても、この会員の集会が最高意志決定機関であり、意志決定は以下に示すように常任会員の意志にのみ拠っている。

6. あらゆる会員の選択は、投票によって行われる。また、投票が常任会員のみにによって行われる場合以外では、問題への決定を協会は行わない。そして、使者が投票箱を回す際に、常任会員以外のもとに持っていかないように、この命令は、あらゆるそうした状況で読まれる。また、投票が同数となった場合には、議長により決せられる。しかし、通信会員は、それが適当と思えば、全ての協会の集会や委員会への出席は自由である。

(SPCK1732:5-6)

しかも、以下に示すように、会員への登録は厳密に行われていた

5. 通信会員と認められる前に、協会または委員会は、彼が「ジョージ王陛下、および法律によって制定された英国国教会に信任を寄せる」ことを確認する。そして、会員としてふさわしいと思われたなら、(司教が提案した場合を除いて) 常任会員のうち2名が調査を依頼される。もし、その人が地方の町に住んでいるならば、書記に命じて、近くに居住する常任または通信会員に手紙を書き、「希望する人物が、冷静で宗教的生活を行っており、会話の能力に優れ、慎み深く、平和を好み、慈善心に富んだ人物であるか」を調査することを依頼する。そのレポートの後、または委員会のレポートの後に、協会は選択を続行する。さらに、会員または書記は、口述によるか書類によるかは問わないが、速やかに報告を作成せねばならない。そして、この命令は、その調査が指示された時点で読まれなければならない。

(SPCK1732:4-5)

さらに、重要なことは、規約の変更までが会員の民主的決定の下に行われる条項が盛り込まれていたことである。前述のように、これは正に近代精神の表れである。

14. 制定された規約は、2回の連続する委員会の集会において廃止・停止・変更が提案されない限り、廃止されたり、停止されたり、変更されない。また、それらの変更は、少なくとも5人の会員の出席による、それに続く2度に渡る協会の集会まで、確定されない。また、同規約は、投票によって廃止や変更が決定されるまで遵守される。

(SPCK1732:7)

この規約の変更は、1716年までの慈善学校規約の雛型にはなかったが、19世紀のブルーコート慈善学校ではその32項に入っている (Blue Coat Charity School 1832:35)。これほどの発展はやはり時を必要としたことを示す。

このように、慈善学校においても、運動の主体としての SPCK においても、会員の集団意志が意志決

定の土台であり、その権威が文書において、しかも最重要事項として規定されているのである。

② 会計原則

この第一の章には、前述の意志決定原則に続く部分に、会計の原則が述べられている。そこには、会計の余剰金の取り扱いについて、それを債権として会員に貸出し、利殖を行うことまでが明示されている。しかし、より以上に重要なこととして、以下のような会計の情報公開原則が述べられていることである。

IV. 会計は、あらゆる収支の公正な会計簿を、金銭がどのように配分せられたかを知ろうと望む会員またその他の者の閲覧に供するため保持する。

(SPCK 1713:5)

これは、現在でも、相当に高いレベルにある情報公開原則である。つまり、この条文によれば、生徒の親が疑問に思っただけで会計内容の開示を求めることも拒むことは出来ないことになるからである。もちろん、当時の貧困家庭の両親に、出納帳を眺めることで問題の有無を発見するということは不可能であつたろう。しかし、そうした権利を猶予されることがなかった点に、この事業の健全な財政を確保しようとした意志が伺える。

さらには、

V. 会計報告は、四半期ごとの総会において、年に2度以上、会員によって精読され、調査を受け、完成されねばならない。

(SPCK 1713:5)

と述べられ、監査を受け、完成された会計報告の作成を義務付けられている。

このような会計報告の原則は、慈善学校のみでなく、運動の主体である SPCK の規約にも明示されている。SPCK では、協会開設の翌週（16/3/1699）ⁱⁱⁱには、常任会員の治安判事であるフック氏が会計の役割を担うことを決定していた。これほど早期に、会計を設けることでもわかるように、SPCK では、財政管理に一方ならぬ思い入れがあり、特に、会計の情報公開には意を尽くしていたことがうかがえる。後には、以下のように、会計は単独の存在でなく「収支に関する委員会」として組織化される。

収支に関する委員会についての規約

1. 牧師である、ディーン助祭長、ウィリアム・ティラード氏、またベンジャミン・ホーア氏が、当該委員会を構成する。そして、協会になされる、全会費、贈与、献金、あらゆる種類の寄付および、協会報告に掲載するそれらの支出の明瞭な記録を保持する。
2. 彼らの報告は、毎年クリスマス後の2ヶ月間、協会が指名する複数の人物により監査される。そして、会員による全ての遅滞金、また利子の発生は、協会に提出される前に、当該監査に報告される。

(SPCK 1732:9-10)

慈善学校および慈善学校運動においては、こうした会計の情報公開の原則と、公正な会計のあり方が、規約において明示されているのである。

ⁱⁱⁱ これは SPCK の議事録の記載であり、この議事録は、McClure により残されている。以降、議事録の記述は、(日/月/年)の形で記載していく。

この公正な会計のあり方は、当然ながら、ブルーコート慈善学校にも受け継がれ、7条から11条までが会計の原則に当てられている。特に、9条と11条は、公正な収支報告に関する命令として以下のように提示されている。

IX.

支払いに関する全ての報告は、毎月最終月曜日の委員会のテーブルに提出されねばならない。そして全ての支払いは、会計のチェックを受け、委員会メンバー三名のサインを受けねばならない。

XI.

施設に関わる全ての現金出納報告は、常に委員会が保持しなければならない。また、季節ごとに会員の検査を受けねばならない。また、慈善のために受けた現金は、直ちに当該委員会の選出した銀行に預けられねばならない。

(Blue Coat Charity School 1832:29)

こうした会計の情報公開と公正の原則が、慈善学校では後世にも受け継がれていったのである。

③ 教員および児童の選定基準

また、この第一の章の最後の部分には、教員と児童の選定に関する基準が会員に提示され、その遵守が命じられている。

規約のVI条で、教員の選定基準として、第一に求められていることが、

1. 英国国教会の会員であり、真面目な生活と会話を行之、25歳以上の者
2. 聖餐式にしばしば参加している者

(SPCK 1713:5)

とあるように、真面目なキリスト教徒であること、しかも英国国教会の会員であることがその第一条件とされている。

次に、生活と性格の良さを以下のように求めている。

3. 自らと自らの感情を、よく規制できる者
4. 柔和な性格で謙遜な振る舞いをする者

(SPCK 1713:5)

さらには、能力として以下のような能力を上げている。

5. 教授に優れた才能を有する者
6. キリスト教の基礎と原理に深い理解を持ち、教区の主教に、又は通常の総会において試験を受け、このことに関する良き解説ができる者
7. 達筆であり、数学の基礎を理解する者
8. 家族を良く治める者

(SPCK 1713:5)

最後に、その証明として、以下のように教区主教の認可を受けることを明示している。

9. 通常総会によって免許を受ける前に、(会員となった) 教区主教により証明された者
(SPCK 1713:5)

このような厳しい教員採用の基準が、規約に明示されていた。しかし、実際には、様々な問題のある教員も多かった。SPCK の議事録には、問題のある教員の直接指導を行ったことも記載されている (25/11/1703)^{iv}。さらには、不正を行う教員の摘発と処罰を、SPCK の指導のもとに行ったことすらあった (20/6/1700)^v。このような実態はありながらも、基本には厳しい教員の採用基準が、明確な成文として記載されていた。

こうした採用基準の細目は、しかし、後年のブルーコート慈善学校の規約には存在しなくなっている。そこには、委員会で教員を選出し、総会において承認されるという内容のみが記載される、つまり原則のみが示され、具体的事項は記されなくなっている。これは、ヴァン・サン・ド・ボールのルールからは変遷を経て、全く異質の組織原理のみが明示される存在として規約があるようになることを示している (Blue Coat Charity School 1832:33)。

また、この教員の選定基準に続いては児童の入学の基準が明示されている。そこには、

VII. 本学校に入校する子どもたちは、慈善の真の対象者であるべきである。また、当該「」教区に(又は近辺に)居住し、満7歳から12歳未満の子どもたちである。また、会員が贈与する子どもたちは、許可を受ける前に、明瞭でなくとも、自らの両親の状況と、自己の年齢等について告知すべきである。さらに、会計と理事たちによる、または会員による、真の慈善の対象であるか、さもなければ、年齢と居住地等の細目により入学資格を与える試験がなされねばならない。

(SPCK 1713:5)

とある。

このような内容に当たるブルーコート慈善学校の規約は、22条にあり、

英国国教会に属する両親の子どもたちが許可を受けることができる。その入学許可の段階で少なくとも9歳になっていなければならない。その年齢は教区主教または助祭のサインのある登録の写、もしくは他の証明に値する資料によって証明されねばならない。…

(Blue Coat Charity School 1832:32)

と記載されている。そこにはやはり、細かい記載はなく、この内容の後に、総会や委員会における認証を必要とする過程が詳述されている。すなわち、具体的内容よりも、総会や委員会の決定に基づくことが、優先されるべきこととして書かれるようになってきたことを示す。

後年の資料も引用したりしたが、これら第一の章にある三つの内容が、会員が直接関わる規約の内容として作成されていたのである。

第2項 規約2 職員および学童に関する規定の提示

次に、慈善学校の規約には、教員の職務規定が掲載されている。この職務規定は、1712年以前には、

^{iv} 「シャドウエルの教員パワー氏の問題ある指導について、執行員は彼に関わるよう命じられた。」

^v 「いかなる教員も児童からどのような謝礼も祝儀も受け取ってはならず、罰則として彼の事務所は没収される、という解決が与えられた」

規約の冒頭にある、前項③の内容に続いて掲載されている。しかも、その量は規約全体の2/3以上を占めるほどであり、この規約の中核となっていた。

しかし、1713年以降は、三つの章の中の一つとなっている。しかも、前項で述べたように、冒頭には、会員の規定、意志決定法、職務規定が置かれるようになっている。ここに、規約の意味の大きな変化が現れていると言える。つまり、第二の章は、前述のヴァン・サン・ド・ポールのルールと同様の内容であり、17世紀以前は、第二の章こそが、ルールの全てであった。しかし、慈善学校においては、この職員の業務内容は、規約の一章でしかなく、中心的な役割でもなくなって来はじめていたのである。もちろん、教員の業務が慈善学校の中心であることは間違いがないし、この規約においても、第二の章は、規約の中の大きなスペースを占めている。それでも、第二の章は、規約の基本として不動のものではなく、会員の総意によって変更可能なルールとして、ここにある。それゆえ、規約の中の第一の存在ではなく、第二の章を占める存在となっているのである。

それでは、以降、教員の業務に関する規約について、その具体的内容を見ていこう。まず、第二の章の冒頭には、

I. 教員は、学校において彼に向けられた業務に常時、教授に充てられた時間である、夏季の午前7時から11時まで、また午後の1時から5時まで、冬季の午前8時から11時、午後の1時から4時まで、携わらねばならない。その業務を通して、児童らのよき学びの改善に最善をかける。また、しばしば現れる、教員の提示や支援への、反抗を防ぐべきである。

(SPCK 1713:5-6)

と、教員の業務の基本内容が明示されている。ここでは、学びの教授の他にも、反抗への対応が提示されているように、慈善学校では、学び以上に従順な成長、特に教会に対する忠誠が重視されていると言える。

また、次の条では、

II. この学校の主たる目的、その目的は王国の貧しい子どもらの教育のためであり、英国国教会にて告白され教えられているキリスト教の実践のためである、その目的がより良く進展するように。：教員は、教会教理問答に示された原理の内に、子ども等を教育することが、その主たる仕事である。

(SPCK 1713:6)

と、その目的を明示した上で、言語の明瞭な発声、教理問答の暗記と理解の推進、行儀作法の教育、様々な不良行為(虚言、悪態、神名をみだりに唱える、主日の軽視等)の矯正、聖書と教理問答で示された、神により禁止された事項を行わないようにするなど、何よりもキリスト教的な行動の教示を、教員が行うべきことが述べられている。

さらに次の条においては、教会との関係性の中における業務を以下のように命じている。

III. 一人でも児童が教理問答を唱えることができるようになったならば、その児童が教会において教理問答の認可を受けるために、教員は牧師に告知をせねばならない。

(SPCK 1713:6)

と、教理問答の認可という教会の公的事業との繋がり役目を担うことを業務としているのである。

一方、次に記載された二つの条は以下のよう、

IV. 教員は彼らに、正しい単語の綴りを、また句読点を使った音節の区別を教えねばならない。これは、正しくよい読み方に必要であり、彼らの読み方を心のこもったものにしていく。

V. 少年が十分的確に読めるようになったならば直ちに、教員は正しく呼びやすい手を教えねばならない。また、算術の基礎を奉仕と徒弟のために教えねばならない。

(SPCK 1713:6)

と一般教養の、すなわち読み書きと少年には算術を教えることを示している。

次には、

VI. 教員は子供たちを毎主日と聖日に二度教会に連れて行かねばならない。そして、彼らに神の家に居る時には、牧師に対していかに振舞うかを、また、教会の公的礼拝に参加することを教えねばならない。そのために、子ども達は共同祈祷書のついた彼ら自身の聖書を常に携えている。

VII. 教員は、朝夕学校において祈祷書を使わねばならない。また、子どもたちに、家庭において起きたとき就寝するときに祈ることを教えねばならない。また、食前食後の恵の言葉を述べることを教えねばならない。

(SPCK 1713:6-7)

と、教会の礼拝に子どもたちを連れて行くことや、祈祷を教えることを義務としている。すなわち宗教実践の教授が教員の責務であることを明示している。

また、次の条には

VIII. 子どもたちの名前は、毎朝また午後ごとに、授業時間に出席しているかの確認のために呼ばれねばならない。もし、いないのであれば、遅刻または欠席の記入とともに、書き記されねばならない。大きな過ちである、悪態や盗難等があった場合には、月または週の集計表に記載され、会員または理事と会うたびに、懲戒または退学の判断のために提示されねばならない。

IX. 教員は、年に3回までは、祝祭の日に休むことを許可できる。

(SPCK 1713:6- 7)

と、学校における児童らの行動に関する管理について記されている。

さらには、

X. この学校は、当該貧困児童の利益のために設計されているのであり、子どもたちの親や、友人に教授することはできない。教員は、子どもたちの友人から、その入学や、休学、その他の口実のための金銭を受け取ってはならない。また、教員はこの学校の貧困児童の他のいかなる子どもたちにも教育をしてはならない。守れない場合には、彼の給与から罰金を徴収せねばならない。

(SPCK 1713: 7)

と不正に関する定義と罰則が明記されている。

また、教員の義務ばかりでなく、

XI. 子どもたちは自身の帽子、ベルト、衣服および他の識別のための印を毎日身につけねばならない。それによって、会員や寄付者が彼らを認識し、彼らの行動が外れたものとなっていないかを確認できる。

(SPCK 1713: 7)

とあるように、子どもたちの義務についても、取り決められている。

このように、教員の業務の内容として、もちろん教育が挙げられているのであるが、それ以上に宗教的な内容、特に宗教的行動の教授が中心課題として挙げられているのである。このように、宗教的行動に関する教導が中心であることは、100年以上のちのブルーコート慈善学校でも変わらず、慈善学校の特徴であった (Blue Coat Charity School 1832:36)。

しかし、前述したように、ブルーコート慈善学校の規約は、ボリュームにおいて、はるかに大きくなっているにもかかわらず、教員の守るべき義務はあまり増えることはなく3ページ10条のみである。一方、第一の章は前述のように、ブルーコート慈善学校においては、10ページ32条という大分の分量となっているのである。このことは、個々の具体的義務の決定よりも、組織の意志決定法に重点が移っていったのであり、慈善学校運動の過程で、組織の意志決定法こそが、規約においては、最重要であるとの認識が広がり、整序されていったのであることが見て取れる。

第3項 規約3 子どもたちの両親への義務

規約の最後の章には、子どもたちの両親への義務が列挙されている。そこには、まず

- I. 両親は、彼らの子供を授業時間に学校へ送れるよう世話をを行う。病気以外のケースでは、家においておかないようにする。
- II. 彼らは、子どもたちを送る際には、洗濯された身なりと髪をとかして、清潔にして送り出す。
- III. 彼らは、子どもたちが自宅においてそうした過ちを犯したことを懲戒し、そのことを彼らの教師に教える。これにより、彼らの子どもたちの振る舞いが改善される。

(SPCK 1713:8)

と子どもたちを学校へ送り出す義務と、その際の注意点が記載されている。

ただ、ここでは、会員・教員・子どもたちに対する条項にあった命令を意味する "shall" が使われてはおらず、命令という厳しい意味を持たない条項になっている。"shall" が使われているのは、4条の中の一文「両親は、過ちへの罰があり、そのことへ耐えるという、学校の修練には自由に従うべきである」という文にのみ使用されている。すなわち、ここでは両親に対する強力な義務というものが書かれた規約ではなく、以下のように、自由意志において従う内容となっている。

IV. この学校の会員は、学校の世話をするためにいるのであり、子どもたちは教員の懲戒によって傷をおうべきではない。懲戒は子どもたちの善のためである。両親は、過ちへの罰があり、そのことへ耐えるという、学校の修練には自由に従うべきである。そのゆえに、子ども達は過ちの中にいることを許されるべきではない。教員は、彼の義務の遂行によって、諦めず行うべきである。

(SPCK 1713:8)

次に、以下のように、家庭における両親の教導のあり方についても述べている。これは、1・2条同様、義務としての”shall”は使われておらず、明確な義務として提示されているわけではないが、守るべき条項として以下のように挙げられている。

V. 両親は自宅において、子供たちへの良き見本となり、良き秩序の内に過ごせるようにさせる。

VI. この学校は、子どもたちへの教育と便益のためのみに奉仕するのではなく、両親にも、特に文盲の両親のためにもある。彼らは、子どもたち同様、自分たちのためにも、自宅において教理問答を繰り返し読誦し、聖書を、特に主日にはよく読み、朝夕家族で祈ることが望ましい。これにより、全てのものが自らの義務を知り、経常的で真面目な実践によって、神の祝福を彼らの上に招くことができる。

(SPCK 1713:8)

最後に、この規約を守れない場合の規定があり、

VII. もし、両親が当該規約（彼らの自宅に用意しておくべき）を守れない場合は、彼らの子どもたちは退学させられ、その学校の制服等は返還される。

(SPCK 1713:8)

とある。上記のように、この項目には強い義務の”shall”は使われておらず、最終的な判断は両親に委ねられているが、この最後の条項が義務の担保として存在している。

一方、ブルーコート慈善学校の規約には、この項目に当たる部分は、2ページ6条しかなく、13年の規約にはない”shall”が多用されている。しかも、委員会の裁可を受けるという、受身の状況が出てきており、ある意味では子どもたちの両親に対する対応が、上意下達といった様相を呈するようになっていく（Blue Coat Charity School 1832:39-40）。このことは、19世紀がむしろ、慈善にとっては後退の時期であり、民主的な特性が薄らいでいたことを示す材料とも言える。

翻ってみれば、いかに18世紀初頭の慈善学校が民主的であり、先進的事業であったかということを示す証左とも言える。

3. 終わりに

以上見てきたように、慈善学校には、詳細な規約の雛型が、SPCKにより進言されてきた。しかも、当初は分類も明確でない一体化した規約であったが、段々と整序され、1713年版からは、冒頭に会員が遵守すべき条項として、規約の条文変更とその手順が示され、その後、協会統治の基本となる、会員の基礎について記述されている。この変化は、ブルーコート慈善学校においては、さらに進展し、規約の2/3が組織の意志決定法の定義となっているのである。

これに対して、教員の職務や子どもたちの義務、子どもたちの親の役割規定は、大きな変更を見ることなく、ブルーコート慈善学校にまで至っているのである。このことを通してみると、規約の中で大きく進化したことは、組織性の進化であり、直接支援の章では、あまり進展は見られなかったということである。むしろ、前項に示したように、子どもたちの両親を主体的存在と捉えず、命令を受ける存在として捉え、慈善学校組織が児童の両親の上にも抑圧的存在としてあるように変化している。そこには、

民主的特性が後退する過程をも見る事ができるのである。

このように、慈善学校は、その組織性の進展という点で、歴史に大きな足跡を残した事業であるという点を見ることができると同時に、当初持っていた自由な雰囲気から、後年になるとむしろ抑圧的な事業へと移っていった様子をも、規約を通して見る事ができるのである。

さて、今後の報告においては、組織性という観点から、SPCK 本体の組織をも考察に加え、より具体的な内容について考察を加えていきたいと思う。そこで、次の報告では、それぞれの実務に携わってきた者たち、特に各学校においては教員、SPCK においては書記・慈善学校の執行員 (agent) について見ていきたいと考えている。彼らの業務はもちろん、特に SPCK の二つの職種に関しては、その実態の変遷も追っていききたいと考えている。なぜならば、彼らは当初、無給のボランティアとして業務を開始していたが、業務の内容の増加により、段々と有給の専門職に変化していくからである。これこそ、ウェーバーの述べる官僚化であり (Weber=1971:318)、近代化の過程として、慈善学校運動の中に官僚化が起こる過程を見ていく事となるであろう。

文献集

- Blue Coat Charity School (1832) A short Account of the Blue Coat Charity School in St. Philip's church yard, Birmingham, from its institution in 1724, to 1830. H.C.Langbridge.
- Charity School, at Horsly-Down (1781) A Brief Account of the Charity School at Horsly-Down, Southwark, instituted in the Year, 1714 London, R. Bishop, Great Newport-Street.
- Charity School at York (1705) An Account of the Charity-School at York for the Educating of Poor. York.
- Clark, Peter (2000) British Clubs and Societies 1580-1800 : The Origins of an Associational World. Oxford University Press.
- McClure, Edmund ed (1888) A chapter in English Church History : Being The Minutes of the Society for Promoting Christian Knowledge for the Years 1698-1704. Society for Promoting Christian Knowledge.
- Ryan, Frances And Rybolt, John. eds. (1995) Vincent de Paul and Louise de Marillac. Paulist Press.
- Society for Promoting Christian Knowledge (1706) An Account of Charity Schools In Great Britain and Ireland : with the Benefactions thereto, and are governed. Also, A Proposal for adding some Work to the Children Learning. Joseph Downing.
- Society for Promoting Christian Knowledge (1713) An Account of Charity Schools In Great Britain and Ireland : with the Benefactions thereto, and are governed. Also, A Proposal for adding some Work to the Children Learning. Joseph Downing.
- Society for Promoting Christian Knowledge (1732) The Standing Order of the Society for Promoting Christian Knowledge. Joseph Downing.
- Unknown (1736) An Abstract of the Regulations and Statutes of the Charity-Schools, Orphan-Hospital and Workhouse at Edinburgh. Edinburgh, Tho.Lumisden and Jo. Roberston.
- Weber, Max (1972) Sociologische Grundkategorien des Wirtshaftens. Johannes Winckelmann ed. Wirtschaft und Gesellschaft.5th ed. J.C.B.Mohr,31-121. (=1979 富永健一訳「経済行為の社会学的範疇」尾高邦雄編『世界の名著61 ウェーバー』中央公論社295-484.)
- 林 信明 (1999)『フランス社会事業史研究－慈善から博愛へ、友愛から社会連帯へ』MINERVA 社会福祉叢書7 ミネルヴァ書房。